

社会的ネットワークと一般的信頼との関連

——ネットワークの密度・中心性・類似性に着目して——

東京女子大学 福島慎太郎

【1. 目的】

山岸（1998）による「信頼の解き放ち理論」（他者との協力関係が保証された社会的不確実性が低い安心状態は、信頼性に関する情報の無い他者一般に対する一般的信頼の形成を阻害する）は、社会科学全体に大きなインパクトを与えた。しかし、この理論は主として実験室状況で検証されており、代表性の高い社会調査データを用いた検討は不十分である。本研究では、社会的ネットワークの密度・中心性・類似性の観点から、信頼の解き放ち理論の予測を実証的に検討した。具体的な理論仮説は、以下の通りである。第一に、社会的ネットワーク密度の高さは一般的信頼を下げると予測した（仮説1）。ネットワーク密度が高い状態では、構成員相互の情報や評判がより多く拡散・共有され、各構成員は協力的に振る舞う（社会的不確実性が低くなる）と考えられるためである。第二に、社会的ネットワーク内で中心性の高いノードと親密な関係を持っていると、一般的信頼は低いと予測した（仮説2）。中心性の高いノードは、新たな関係形成を保証する媒介者としての機能を果たし（Coleman, 1990）、社会的不確実性を下げると考えられるためである。第三に、類似性が高い他者に囲まれていると一般的信頼は下がると予測した（仮説3）。類似性の高い社会的ネットワーク内では他者の行動予測の精度は相対的に高く、社会的不確実性は低くなると考えられるためである。

【2. 方法】

「全国ネットワーク調査」の二次分析を行った。この調査は離島を除く日本全国の住民基本台帳から層化無作為抽出された25~74歳の男女2,200人を対象とした留置法による調査であり、有効回答数は1,445、回収率は65.7%であった。質問紙から、以下の測定項目を抽出した。一般的信頼：「一般に、人は信頼できている」（4件法）、ネットワーク密度「私の友人の友人は、私にとっても友人であることが多い」（4件法）、リンクを持つ他者のネットワーク中心性：「知り合いの中に、日頃よく話をしたり、やりとりをしたりする人と顔見知りの人は多いか、少ないか」（3件法。4人のalterの平均値を算出）、ネットワーク類似性：「日頃よく話をしたり、やりとりをしたりする人と、趣味や関心が似ているか、考え方や価値観が似ているか」（有無を尋ねる2項目。それぞれ4人のalterの平均値を算出）。これら測定項目データに対して、一般的信頼を従属変数、ネットワーク指標を独立変数としたマルチレベル分析（自治体ランダム切片モデル、統制変数を含む）を行った。

【3. 結果】

分析の結果、仮説1、3が支持され仮説2が棄却された。1）ネットワーク密度が高いほど一般的信頼は低かった（ $b = -1.12, p < 0.001$ ）。2）リンクを持つ他者のネットワーク中心性が高いほど一般的信頼は高かった（ $b = 0.08, p = 0.023$ ）。3）ネットワーク類似性が高いほど一般的信頼は低かった（ $b = -0.26, p = 0.002$ ）。

【4. 結論】

本研究では、社会的ネットワークの密度・中心性・類似性の観点から、信頼の解き放ち理論の予測を実証的に検討した。仮説2が棄却された理由として、特定の他者に対する個別的信頼が一般的信頼の形成を促進することを想定した「信頼の還元理論」が成立している可能性が示唆される（稲垣, 2009）。信頼の解き放ち理論および還元理論それぞれが成立するプロセスの相違に関する更なる実証的検討が求められる。